

家に帰り着くと寝れなかった。それは、寝れなかったために、思ひ寝で、思ひにふれても、思ひのどにかく自分の巣穴に

戻れた安心感で、長い温息をついて、眠りましょう。巣穴のなかの、大きな眠り

に、幾重にも幾重にもくみこまれながら、眠りの深さを、犬のように身体を丸めた姿勢でもって、ぼんやりと（ぼんやりと）して、夢の通過をやり過ごす。眠りの深淵に閉ざされて、流れがくる。過剰な夢など見えない。むしろ、ひっそりと熟成する水素の夢に似た眠り。——（ビクニック）から

明日になれば、わたしは

この軌跡を夢から眠

覚めることが出来るだろう

うか。ふたたび、彼女のことを忘れることが出来るだろうか。それを

聞くことと見ることからわたしが逃れてきた。彼女の言葉と視線が、夢のなかに無限の薄明として広がってつづけることから、逃れることが出来るだろうか。あざれた行為ではなく、あざれた行ない。行為こそが取りかえしようのない。時間のなかで宙返りにされ、聞くことを拒んだ言葉が、わたしに無限の言葉を繰り出すことを命令するのだ。

——（意味な出来）より

わたしはわたしのあらゆる感覚の触手を世界に向けて伸ばす。すなわち、それが書くということでもあるのだが。すると、それと相似形の触手が、わたしの前にあらわれる。わたしにとっては未知の者が、同じ触手を伸べて、それを書くのである。そして、それをわたしは読むのだ。わたしは書く、とわたしは書く、とあの未知の触手の書き手も、わたしは書く、とノートに記す。こういうことが、わたしの書くあらゆる文章、あらゆる単語のうしろに、記す。そして、記すにつづけるだろうという信じがたい思いにわたしは苦痛を感じた。

——（競争者）から

単新集

海

この詩は「海ぞ増地」というたった一行から出来上っているというのである。余分な贅言のようなく言葉、本質を部屋からくくってしまう不透明な観照のような言葉をけずり取り作品を彫削しているうちに、残ったのは、この一行になってしまったのだそう。しかし、この一行は、宇宙と人間の間、存在の一切を、海のように飲み込み、増地のようにならざるを得ない。この一行で、すなわち全ての詩の持つ同義反復という欠点をまねがれてはいないのだ。すなわち、海はまさしく増地なのであるが、これは完結的な同義反復なのである。とNは語った。

——（書籍のタンゴ）から

金井美恵子

彼は夢の中で、自分の今までの人生のすべてが、行なわれる。それは、自分の考え、自分の言葉、すでにどこかに書かれてあることをなぞっている。このことは百科事典にもある大抵の物語に書いてあるのだ。彼の記憶しているあらゆる出来事、その本のなかに、末尾の項目別、索引付きできちんとまとめられ、出典を示す記号が付けられていた。彼は非常に好奇心と恐怖心をもってその本を読みはじめるが、実はその瞬間、今、その本を書きつづけるのが自分自身であることに気づく。

——（フィクション）から

彼は永遠に彼自身であることに耐えられなかったのだが、わたしは——。わたしはといえ、永遠にわたし自身であることが可能だろうか。そして、わたしは彼の誰なのかを、この文章の最後に明かしてみたい。読者に。三冊の小説と一冊の評論集に集められた分量の小説とエッセイを書き、「人生の時間」という文章を最後に書くことをやめた男が、十年ぶりに文章というものを書いている。このわたしが、ということ。

——（人生の時間）から

そしてわたしはこれを書いた。彼女の「うしろ」に電話のメモをとったり録音をしたわけではないが、彼女の書いたことは、おぼろげのところ真実だ。というより、正確にいえば一部が真実をついている。彼女はこれを、今わたしに書いているこの文章を、読むだろうか。彼女は、あなたは何のために小説を書いているのか、本当のことをおしえてくれ、といった。本当のこと！なぜ（彼女）は本当のことを知りたがるのだろうか。——（声）から

カメラのなかで何かが通過されるのだ。色彩を白と黒に分解されることにおける現象なのかとも思ったが、もちろんそうではない。画面のなかでは、なにが何であるというものが、世界の無秩序とでもいふべきものが、小さな画面のうしろで暴力的に展開されるのである。わたしには無秩序や不均衡と見えないものが——それはそれとして、どう不自然に見えようとも、そこにあることで、何かいふような、無秩序に置かれたあらゆる物、画面のなかでは、不快な見るも無情な姿をさらしはじめる。——（影）から

單語集

金井美恵子

筑摩書房

●
——
單語集

●
——
著者 金井美恵子

昭和五十四年十二月二十日 初版第一刷発行

●
——
発行者 関根栄郷

●
——
発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話東京二九四一六七二（編集）

二九一七六五二（営業）

振替東京六一四二三

●
——
装幀者 高田修地

●
——
©金井美恵子 一九七九

●
——
厚徳社印刷

●
——
積信堂製本

Printed in Japan 0093-8093-4604

單語集
目次

競争者……………7

窓……………27

薔薇のタンゴ……………47

人生の時間……………69

曖昧な出発……………87

フィクション……………107

声……………131

月……………155

境界線……………173

調理場芝居……………189

ピクツク……………211

春の声……………233

あしがき……………252

單語集



競争者

北の地方にむかう急行列車のがらから空きの食堂で（わたしの他に客は一人しかいなかった）この日二度目の食事をした。旅先の旅館で朝食はしっかり食べておいたものの飛行機や汽車の乗りつぎの繁雑さにまぎれて昼食を食べそこねていたこともあるが、時々自分でもあきれるくらいの食欲を持つことがあって、この時が丁度そんな具合だった。この地方名産の帆立貝の淡泊な味のグラタンを二人前に、やはりこの地方の特産の牛肉のローストと、グリーン・アスパラガスのサラダと桃のシヤーベットを食べた。食卓には水飲み用のガラスのコップに生けられたピンクのカーネーションとアスパラガスの葉が飾ってあって、どうしてもカーネーションはアスパラガスの葉と一緒に生けられるのだろうかと考えたが、そう考えた瞬間に、あまりにも単純な答えがわかってしまったので面白くなかった。——ようするに、カーネーションという花は、真っすぐに伸びた人工的な莖に、ほんの申し訳程度の

髭状の葉っぱがくつついているだけだから、花だけを山盛りに飾るのでもないかぎり、ひどく貧弱に見えてしまう。アスパラガスの葉のレース状の緑の薄紗は、カーネーションという人工的な花に加えられたさらに人為的な衣装としての葉なのだ。そんなふうになわたしは面白くもないありきたりの結論を下した。食事を終えて、コーヒーを飲みはじめるところには、森林のむこうに日が沈みはじめて、あたり一面は薄薔薇色の影に包まれながら、かすかに銀色の光を発していた。窓の外を規則正しい速度で移動して行く景色は、人間の生活をしのばせる電燈の明りの点滅すらなくて、広大な原野（不毛といわれている）と、その不毛と闘って自分の領土を少しでも拡大しようとして今でも闘っているような常緑樹の森林と、森林地帯が突然の断層でえぐられて出現する岩だらけの溪谷の底をわびしげに流れる小川、岩の裂け目にしがみつくようにして生い繁って黄色い花を咲かせているねじくれた低い灌木とに限られていた。こうした単調な風景の中で原野をぬって流れる川のリボン状のフィルムのようにぬめぬめと光っている銀色の輝き——そしてその川辺に優しさを添加するアカシアや猫そっくりの灰色の毛に覆われた花を咲かせている猫柳や野生の

草花の色どり——は眼を楽しませたし、昼間の間、汽車は小さな牛の遠景をちりばめた放牧地の間を走ったりもした。しかし、夜になってしまえば、そうした眼を楽しませる風景も、むしろ森林地帯の孤独さを増すだけだった。二杯目のコーヒーを飲み終えた時、ついに黄昏の最後の光が丘陵に呑みこまれた。

カーヴにさしかかると汽車の振動で、カーネーションの入れられたコップの水が揺れ、カーネーションの花は首を揺らすようにして踊りあがるのだった。わたしは食後の充ち足りた幸福感と旅行の疲れで軽い欠伸をしてから煙草に火をつけ、ある人のことを思い出して、少し笑った。彼がここにいたら、《アルンハイムの領地へむかっているみたい》と言ったかもしれない。その人は、いつも小説の冒頭の数ページだけ読んで、その続きを永遠に読むことがないのだった。そしてわたしは、おそらく永遠に小説の冒頭の部分しか書かない。作りおえることの《悲しみ》を延期させようとして？

ななめ前のテーブルでウiskiを飲んでいた男が、わたしに笑いかけたのは、ちょうどその時だった。二人しか客のいない食堂車で一人がもう一人の人間に笑いかけられたとしたら、それを無視するようなことは、よほど気の強い人間でもないかぎり出来ないだろうし、わたしはおよそ気の強い人間とはいえないから、まあ礼儀にかなう程度の微笑を返さないではいられなかった。

接続点の駅で降りかえるのでなかったら、終着駅に到着するまでに四時間かそれ以上あります。よろしかったら御一緒にウiskiでも召しあがりませんか、その男は声をかけ、これはいうまでもなく、無聊の時に話しの聞き手を見つけ出して喜んでゐる者が、押しつけがましさを愛想の良さで包んで常套的に口にする誘いの決り文句なのだが、とつけ加えた。「他人のお喋りをきくということに関して、どうしてこう寛大なのだろう」とわたしはその時思った。地味でも派手でもない無性格といった感じの青灰色のツウィードの上着を着ているこの小柄な男は、いったい何歳ぐらいなのだろう。

わたしたちのような職業の人間には、普通、外形的印象でもってある程度人物を見わけける力——ようするに職業的な訓練からくる勘のようなものなのだが——があると云われているし、また事実、人物を見わけける自分自身の、鑑識眼というものを信じることによる人間全体に対する微かな輕蔑の念のようなものが、わたしたちの職業の一種の矜持を支えているようなところもあるらしい。もっとも、こんなことは、わたしには大變くだらないことに思われるのだが。わたしがこの職業を氣に入っているのは、旅が出来るということが第一の理由だが、もう一つは、わたしたちの売り歩くものが世界の目録だということだ。わたしたちは言葉によって、言葉に含まれる最もロマンティックな力によって他人を魅惑しなければいけないのだ。一般の人間の知識というものに対するロマンティックな夢想につけ込まなくてはならない。知識を無名性のなかに世俗化させ、世界が百科事典のなかに収まるほどのものだということを、納得させなければならぬ。ようするに、百科事典の中に集められた単語を中心に、なにかまるで不変で確実な《事実の世界》が存在している、

といった甘美な夢想を売り歩くのである。百科事典は、不変の事実の集大成と、一般の御家庭では思われている。事實は古びることがないだろうから、これはひどく割のいい買物なのだ。しかし、御存知のように百科事典ほど早く古びてしまう書物はない。もっとも簡単な例をあげれば、十年前の百科事典はある都市の人口の数を正確に記すが、十年後の現在では、その都市の人口は倍近くにも増加してしまっているのだ。科学の進歩というものが、そのとおりだ。最新の事実が、よりよいより正確な事実であるという分野は科学をおいてない。たいていのものは、反対に、古ければ古いほどなつかしくもあり、良いものでもあるのだけれど。

わたしたちは、最初に彼の職業に関する話をした。旅行の目的はお仕事ですか、とわたしがありきたりの質問をしたので、彼は自分の職業について説明したというわけだ。「それじゃあ、荷物が大変ですね」とわたしは言った。彼が百科事典の全巻の見本を持って旅をしているような気がしたものだから。もちろん、わたしには他人に話してみるようなロマンティックな自分の身上話などなかったから——ある